

— 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

主人公の月原一整は、銀河堂書店の優秀な店員であったが、ある出来事をきっかけに、長年勤めた店をやめざるを得なくなった。途方にくれ、ブログで知り合った桜風堂書店の店主に相談しようとい会いに行く。すると店主は入院しており、「書店を任せられないか」と一整は、急な申し出を受ける。とまどいながらも、とりあえず店の様子を見に行くことにした。そこでは店主の孫の透（小学生）がむかえてくれた。透は母親の再婚相手と折り合いが悪く、祖父である店主のもとで暮らしているということだった。店を引き受けるかどうか迷いつつも、とにかく店を開けることにした。

夜になるまで、何人ものお客様が、入れかわり立ちかわり、桜風堂をおとずれた。

適当なところで、一整は閉店の札を下げた。店の明かりを落として、ガラス戸にカーテンをかける。店内が急にしんとした。透と目を合わせて、ふたりで笑った。

「おつかれ様」

どちらからともなくそういつて、ハイタッチのように、手を打ち合わせて、笑った。

長い一日だったなあ、と思った。

（でも、いい一日だったな）

腕も足も、**a** **ココチ**よくつかれていた。お客様と話し続けていたので、のどもつかれていた。

でもそれが少しも不快ではなかった。

透がいなかったら、自分は二十四時間でも店を開け続けていたような気がした。

「透くん、レジの鍵はどこにあるか知ってる？」

透はうなずくと、身をひるがえし、どこからか銀色にかがやく鍵を持ってきた。

① **重みを感じる**それを受け取って、

「明日、おじいちゃんに話して、店を開けさせてくださいとたのんでみようと思うんだ」

そこにとびらをたたくお客様がいるのなら、配達を待つ家や店があるのなら。

（そして、そこに書店員がいるのなら）

店を開けなければいけないのだ。きっと。

すっかり体になじんだエプロンはずした。明日また貸してもらうために、丁寧にたたんで、パソコンの前の椅子の背にかけた。

透に**b** **ツ**れられて、うわさの町営の温泉に行った。暗くなった空にはちかちかと星が数え切れないほどにかがやいていた。

ふたりがおとずれたときには、他に客はいなかった。夜空に桜の花びらが流れる半露天風呂で、一整は、これは何かのご褒美のようだな、と思いつつ、その温泉のこちよさを楽しんだ。

その温泉で、そして帰り道で、透とずっと話していた。桜風堂のこと、店主のこと、そして、本のこと。話はつきなかった。

透は、東京にいたころは、よく母親とこんなふうにお風呂に通ったのだ、と話してくれた。そのころ住んでいたマンションから少しだけ歩いたところに、スーパー銭湯があった、そこのお風呂をはしから試すのが楽しかった、と。

母親は美人でかしくくて、とても優しく、デザイナーの仕事をしていた、と。ずっとひとりで透を育てていたけれど、デザイナー会社の社長さんにどうしても望まれて、結婚したのだ、と。そのころ、お母さんは仕事がうまくいかずになやんでいたそう。それもあって、結婚へと心がかたむいたらしい。そしてそのひとは、透と同じで、だれかが幸せになることを喜ぶ質だった。自分がプロポーズを受けることで、目の前のこのひとも幸せになるのなら、と、つい思ってしまったらしい。

「そしたら透にもお父さんができるものね」

と、母親はほほ笑んだそうだ。

「真っ白いウエディングドレスが、お姫様みたいで、とっても幸せそうだったんです」

透は細い声でそういつた。夜の薄闇の中、どんな表情だったのか、それは見えなかった。

桜風堂の二階には、古い児童書を集めた、子ども用の図書館のような場所があるそうだ。昔はそこで読み聞かせの会があったりしていたそう。と、透は教えてくれた。

「亡くなったおばあちゃんが、そういうこと好きだったんです。子どもたちはたくさん来ていたそうです。でももうおばあちゃんはいないし、町の子どもも減っちゃったから」

そんな話をしながら、店の近くにもどると、出るときに消し忘れていた、「本」のかたちの赤い明かりが、夜道にぼんやりと光っていた。

闇を照らす小さな灯台のように。ここに本があると、道を行くひとに教えるように。

②「一整と透は、その光をしばし見つめていた。」

店のおくに、ダイニングキッチンがあった。

透は「うちのもので申し訳ないですが」といいながら、塩麴しほこうにつけていたらしい鶏とりのもも肉とキャベツを「ま油でさつと焼いて、焼き鳥どんを魔法まほうのようにこしらえてくれた。

トマトとたまねぎのスライスをそえるのも忘れない。そうしながら、少年は三毛猫みけねこに食事をあたえ、*オウムの世話まで引き受けてくれた。そういうわけで、ふたりと二匹にひきは、一緒に、楽しい夕食をとったのだった。

甘辛あまからく、サトウc醬油しょうゆで味付けをした焼き鳥c井は、お世辞せじぬきでおいしかった。塩麴の効果で、肉はやわらかく、ほろほろととけるようだった。楽しかった労働の後、それもいろんな会話をしながらの食事だ。さらにおいしい。

食後には、ババロアまで出てきた。

「おじいちゃんがお見舞みまいにおいしい紅茶の葉をいただいたので。上等な生クリームも近所の方にかけていただいたので、ミルクティー風味のババロアってどうかかなと思って」

きれいなミントの葉がそえてあった。

スプーンで一口すくってみて、一整は大げさでなく、息をのんだ。もちろん材料も新鮮しんせんで、良いものなのだろう。だけど。

「料理とお菓子作り、上手なんだねえ」

「好きだけです」少年ははずかしそうに答えた。「うち、母が働いていたので、何でも自分でできるように覚えたんです。で、作るならおいしい方が、自分も楽しいですし」

「食べるひがおいしいっていつてくれると、自分も幸せになる？」

「はい」にっこりと透は笑った。

この子は、自分と似ていると一整は思った。

昔、父に飲み物の入れ方を習い、軽食のレシピを見て覚えたとき、あのころは **ブキヨウ**d にしか作れなかったパンケーキやサンドイッチを、父や姉が喜んでくれるとうれしかった。自分が食べておいしいより、ずっと楽しかった。

そんなときの自分は、きっとこんな表情で笑っていたのだろうな、と思った。

ふと、透が目をふせて、きいてきた。

「一整さん、猫は好きですか？」

「猫を飼いたいなあって思ったことはあるよ」

軽い調子で一整が答えると、透はいった。

「もしぼくが、このアリスをあなたにおしつけたら、おこりますか？ 飼ってほしい、っていったら。無責任だって、しかりますか？」

「どうして？」 一整はとまどってきき返した。

「この猫は、君の猫じゃなかったの？」

透は深くため息をついた。

猫は床からテーブルの上が上がってきて、不安そうな顔をして、少年に寄りそった。

「うちの猫みたくです。おじいちゃんが入院中で家にいないのをいいことに、ぼく、勝手にこの猫を家に入れてたんです」

「そうなの」

さみしかったろうし、仕方ないだろう、と思った。「おじいちゃんに言えば、この家に置くことを許してくれるんじゃないかな」

「でも、おじいちゃん病気だし、お店がいそがしいから、猫は迷惑めいわくかもしれません」

「君が世話するといえばいいんじゃないの？」

「駄目だめなんです」透は首を横にふった。

「ぼくは、もうここを出て、自分の家に帰るからです。アリスは家にはつれて行けません」

一整はしばらく言葉が探せなかった。

「いやあの、きみ、透くん、どうして、どこに帰るなんていうの？」

父親や母親のことを、本人に直接にはきけなかった。きくことで、自分が知っているということ、この線の細い少年を傷つけてしまいうな気がしたからだった。

うつむいた少年は、やせた子猫をだき上げ、だきしめて、涙を^{なみだ}ヒトスジ流した。

「——ぼく、おじいちゃんが大好きなんです。優しくて強くて、かっこよくて、ぼくなんかのことを、ほんとに好きでいてくれるから」「おじいちゃんは君のことをほんとにかわいいと思うてると思うよ。大事にしてるよね。なのに君は、おじいちゃんを置いて、家に帰るの？ええと、子猫ともさよならして」

さよならという言葉がわかったように、子猫が少年の顔を見上げた。

「でもおじいちゃんは病気だから——ゆっくり休んでいてほしいんです。ぼくは、このお店のことが好きだけど、ほんとには迷ってて。ほんとはおじいちゃんのことを思うなら、閉店しようっていった方がいいのかなとか。でも、ぼくがいると、おじいちゃんはおくのためにとって、無理にでもお店を続けそうで……それにぼく、このお店が好きだから」

透の目に涙が盛り上がった。

指先でその涙をぬぐって、少年はいった。

「ここにいると、おじいちゃんに、お店を続けようっていつちやいそうだから、ぼく、いない方がいいんです。ほんとには東京に、自分の家があるんだから、帰った方がいいんです」

涙をこらえ、何度かため息をつきながら、やっとそれだけの言葉をつむぎ出した。

「透くん」 一整は静かにいった。

「きみは、ここにいたいんだらう？」

「いたいけど、いちゃいけないっていうか」

「いたいの、いたくないの、どっちなの？」

「いたいです」

「桜風堂には閉店してほしくないんだよね？」

「でも、おじいちゃんが無理をするから」

「おじいちゃんのこととは考えなくていいから」

③「一整はいきつた。「子どもはおとなの心配なんてしなくていいんだよ。おとなは子どもが思うより、ずっと強いんだから」自分の頭をなで、肩^{かた}をたたいてくれた父親の、その大きく温かな手を、思い出していた。

*あの日の父なら、きつと目の前で泣く少年を見れば、同じことをいったらうと思う。

笑顔^{えがお}で、心配するな、といっただろう。

いま、そっと透の肩に手を置く、自分の手に、わずかでもあの日の父の手と同じ強さや温かさがあるのならいい、と思った。

「君は、桜風堂書店が好きかい？」

透は、細い首を折るように、うなずいた。

「じゃあ、なくならないようにしようよ」

一整はいった。「だれかの大切な居場所は、守らなきゃいけないんだ。守れるときにはね」

やせた三毛猫が一整の顔を見上げている。かしこそうな瞳^{ひとみ}だった。一整は子猫にもほほ笑みかけ、「大丈夫だよ」といった。

「猫だって、自分の居場所についていいんだ。そこで幸せになっていいんだよ」

透は静かにすすり泣いた。

夜空をかけるように、春の風が通り過ぎた。

オウムがふとはねてきて、一整の目をのぞきこむようにすると、甲高^{かんだか}い声でいった。

④「ナサケハヒトノタメナラズ」

「まったくだね」 一整は笑って答えた。

「透くん、お茶、ぼくがいてもいいかな？」

一整は、透に声をかけた。「こう見えてもぼくはね、おいしいお茶やコーヒーをいれるのは、君に負けなくらい、うまいんだぞ」

⑤透が涙にぬれた顔をあげた。笑顔だった。

古いコンロにかけたやかんでお湯をわかしながら、一整は窓ごしの夜空を見た。

すりガラスの向こうには、黒曜石^{こくようせき}をはめこんだような、暗い夜が満ちている。

でも、やがてこの夜が終わり、朝になることを一整は知っている。この町でむかえる初めての朝の空は、どんな色なのだろう。

(村山早紀『桜風堂ものがたり』PHP研究所)

*注 オウムⅡ 一整が飼っているオウム。

あの日の父Ⅱ 一整は小学生の時、父と姉を事故で亡くしている。

問一 a e のカタカナを漢字に直しなさい。

問二 ——線部①とありますが、何からくる「重み」を感じているのですか。最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。
ア 銀製のカギの重量 イ 店の経営を担^{にな}う責任 ウ 一日働いた体のつかれ エ 桜風堂書店の歴史
オ お客様からの期待

問三 ——線部②のときの二人の心情として最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。
ア 桜風堂の二階で児童書の読み聞かせをしていた「おばあちゃん」の姿を思い出し、しみじみとなつかしんでいる。
イ 桜風堂には、昔、子ども用の図書館のような場所があったが、それが無くなるうとしていることを悲しんでいる。
ウ 桜風堂の周辺は夜になると真っ暗になるので、小さな光が街の人の役に立っていることをほこらしく思っている。
エ 桜風堂は街の人にとって、本を読んでゆったり過ごす機会を提供する場であり、改めてその大切さを感じている。
オ 桜風堂はこの街で長く続いている店だが、まだまだ知られていないので、もっと知ってもらいたいと思っている。

問四 ——線部③とありますが、「一整」のどのような気持ちが分かりますか。最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。
ア 「おじいちゃん」は大人だから無理するようなことはないと分かっているので、心配する透を安心させようとする気持ち。
イ 「おじいちゃん」の今後の仕事の準備に関わる大事な質問であるのに、きちんと答えようとしない透を、しかろうとする気持ち。
ウ 「おじいちゃん」を心配し、自分の気持ちをおし殺そうとする透が、素直^{すなお}になれるように、支えてやりたいという気持ち。
エ 「おじいちゃん」を気にして、本当は桜風堂にいたいのか、いたくないのか、はっきりと言わない透に、いらいらする気持ち。
オ 「おじいちゃん」の代わりにはならないが、父親がしてくれたことをまねて、透に大人のかっこよさを見せようとする気持ち。

問五 オウムがいった、——線部④「ナサケヒトノタメナラズ」について、後の問いに答えなさい。

- 1 このことわざの意味を答えなさい。
- 2 この言葉を聞いて「一整」は「まったくだね」と言いますが、どういうことに対してそのように思ったのですか、説明しなさい。

問六 ——線部⑤での「透」の心情を、ここにいたるまでの変化もふくめて説明しなさい。



次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

古臭い教師のような物言いになりますが、(A) 本はたくさん読んだほうがいい。

「本を読め」なんて台詞は、(B) 頭のかたそう人間の講釈の代表格かもしれない。

(C) そんな指摘をされて、聞く耳を持つ人がいるのかどうか。

学業の根っこを支えるのは国語能力だから。どんな教科もそれを学ぼうとて言葉による思考力が不可欠だから。コミュニケーション能力を高めるには読書が有効だから——。(D) 将来なにかの役に立つから、書物になじんでおいたほうがいい。

本当でしょうか。(E) 胡散臭い。

わたしが読書をすすめるのは、そうした漠然とした理由からではありません。

① 仕事や世間の奴隷にならず、くだらない流行からのがれ、そして孤独にたえるためには、本を読み続けなければいけない。そう固く信じるからです。

わたしの半生において、本を読むことは何物にも代えがたい、最大最強の支えでした。わたしは読書から多くの滋養を得て今日まで生きてきたし、それはこれからもそうでしょう。

どんな境遇や職業の人でも、書物にふれることぬきに、生きる手ごたえはつかめない。わたしはそう考えます。

学校教育の過程で書物を読む機会は多くあります。読書感想文のひとつやふたつ、だれしも書かされたと思いますが、苦痛を感じた人も少なからずいるでしょう。そんなものはうまく書けなくてもかまわない。

本を読まなくても生きてはいけます。本を読まないからといって飢えるわけでも、病気になるわけでもない。

それでもわたしは、読書を強くすすめます。

いまあなたを取り巻く環境とまったく異なる世界が、この世のどこかにまちがいに存在するという実感を書物はもたらしてくれます。読書を通してあなたはいろいろな人生を体験することができます。

以前、編集者がわたしにこんな話をしました。

いま、若い人の多くは、a ヒセイキ労働者として本当に安い給料でこきつかわれている。知り合いの女性にもそういう人がいるが、彼女の楽しみはこつこつ貯めたお金で、そこらへんで投げ売りされている化粧品の中からいいものを見つけ出して買うことらしい。将来のことなど考えられないし、考えたくもない、という生活。田中さん、その子の部屋に本は何冊あると思いますか？ 一冊もないそうです。文学、小説、漫画、なにか一冊でもあればいぶんちがってくるのに。だから別の価値観や、ちがう生き方があることを、彼女は知らないんです——。

その話を聞いて、わたしはとつさに、本が一冊あるかどうかでそんなに変わるだろうか、大げさではないかと思ってしまった。

でも、よく考えてみれば、大げさでもなんでもない。本が一冊あるかどうかは決定的なちがいです。

② 読書とは、時間がかかる行為です。しかも、そこに書かれている内容の意味がよくわからない、何度読み返しても理解できない、そんな事態もままある。

たとえば、そもそもある文学作品をまるごと一冊理解するのは、まず不可能です。もし理解できたとしたら、それは錯覚でしょう。簡単に理解できず、答えも見出せない。だいいち設問(テーマ)はなんなのか、それすらはつきりしない場合だってある。ということは答え自体が存在しないともいえる。

架空の人物たちが出てきて、とらえどころのない言動をし、当人たちですらうまく説明できない感情を*披瀝するのですから、読み手に理解できるはずもない。

なぜこの著者は、登場人物にこんなことを長々語らせているのか、なぜこの著者は、こんな七面倒な書き方をしているのか。そう思うのは往々にしてあることで、だから、③ 名状しがたいなにかにふれた、という実感さえ得られれば、もう充分だと思えます。

読んだ成果として、あなたに実用性や実践性が備わるわけではなく、言ってみれば寄り道の時間を過ごしたようなものです。直接的な利益を目指すなら、そんな暇つぶしはやめて、コンピュータのプログラミング学習に打ちこんだほうがいいのかもしれない。

でも、目に見える効率とは無縁である代わりに、読書はあなたに可能性をもたらしてくれます。あなたをb タガヤして豊かにしてくれる。いままでとらわれ、硬直してしまいそうな、あなたの考えや価値観をゆさぶり、先を切りひらくための手がかりをささずけてくれる。

それは思考停止のc タイキョクに身を置くことであり、それをして希望と呼んでいいのではないか。

いまあなたがいる世の中は、あなたの頭の中だけで完結しているのではなく、外にはそれと価値観の異なる無数の世の中がある。外にはあなたの思考や発想と大きくかけはなれた価値体系がある。読書はあなたにそのことを知らしめてくれる。

あなたが現状に窮しているのであれば、すなわち奴隷になっているのであれば、本の世界にひたる孤独な時間は、無数の選択肢をもたらす、希望の光となる。とどこおった思考をたがやしてくれる。

読書とは奴隷におちいらなかったための、奴隷状態からにげ出すための、手引きにもなりえるのです。

実益のみを追求するなら、コンピュータのプログラミング学習に打ちこんだほうがいい、と先に述べました。いま日本ではプログラミング

教育が盛んです。ここ一、二年のあいだにスクールは^dゲキゾウし、子どもも社会人も、この新しい技能習得に^{はげ}励んでいるようです。

あらゆる産業は、デジタル技術のさらなる^eハッテンによって、いまある限界をつきぬけ、どこまでも成長していくのかもしれない。ただし、電子化が進めば進むほど、人間個人の出る幕も減っていくはずはです。

コンピュータがますますかしくなれば、プログラミングをいかす仕事自体、コンピュータがこなすようになる。あなたがプログラミングを学び、それを駆^く使^しするところの未来の仕事は、おそらく機械が精密にやっけるはずはです。そこに加わられるのはごく限られた数の人間なので。反対に^④多くの人間がコンピュータの奴隷となり本人たちはそれに気づかない、ということも考えられる。

デジタル技術による効率化の上昇は結果的に、人間の参加をこばむ力学につながるのだと思います。さまざまな仕事の現場では確かに効率が求められるでしょう。そのメリットは十分に理解できます。しかし、この肉体は、この心は、この思考は、効率からはなれた場所で保たれるべきですし、そこでしか本来の姿をなさないとわたしは考えます。

^⑤アナログの時空は、生き続けるかぎり、どうしたって必要です。だから、わたしは読書にこだわります。

(田中慎弥『孤独論』徳間書店)

*注 披瀝する＝心の中を包みかくさず打ち明けること。

問一

a

s

e

 のカタカナを漢字に直しなさい。

問二 (A) () (E) に入る最も適切な言葉を次の中から一つずつ選び、それぞれ記号で答えなさい。ただし、同じ言葉を二度以上使ってはけません。

ア とにかく イ いよいよ ウ どうも エ やはり オ もはや カ いまさら

問三 ——線部①の理由を説明したものと最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 人生に行きづまったとき、その打開に必要なものは、自分の中の価値観を確立することであり、これは読書を通して可能になるから。

イ コンピューターを使いこなし効率を上げることが求められる社会では、一人の時間を作って息ぬきに本を読み、自分を休ませることが必要だから。

ウ 学業に不可欠で、社会に出たときに必要とされるコミュニケーション能力を高めるためには、本から人間や社会とのつきあい方を学ぶべきだから。

エ くだらない流行にのらないようにするためには、流行の良し悪しを判断することが必要であり、それには本を読んで研究するのが一番良いから。

オ 何も考えずに一心不乱に仕事を正確にこなせるようになるために、人間は一人で本を読んで学び、自分の能力を高めることが必要だから。

問四 ——線部②で言っている「時間がかかる」読書は、世間ではどのようなとらえられていますか。

問五 ——線部③について、なぜそのように言えるのですか、理由を説明しなさい。

問六 ——線部④とはどういう状態ですか、説明しなさい。

問七 ——線部⑤のように筆者は言っていますが、あなたにとっての「読書の魅力」は何ですか。あなたの読書体験にもとづいて、三〇〇字以内で述べなさい。なお、句読点も一字として数えなさい。

国語 解答用紙 (その二)

一

d	a
e	b
	c

問一

問二

問三

問四

問五

1	2				

問六

二

d	a
e	b
	c

問一

問二

A
B
C
D
E

問三

問四

問五

問六

得点

受験番号	
------	--

国語 解答用紙 (その二)

二

問七

A large grid for writing answers, consisting of 20 columns and 25 rows of small squares. A vertical margin line is present on the left side. At the bottom of the grid, there are numerical markers: '300' at the far left, '200' at the 10th column, and '100' at the 20th column.

300

200

100

受験 番号	
----------	--